JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	アジアの音
Author(s)	赤木，正人
Citation	日本音響学会誌，65(1)：1-2
Issue Date	2008-12-25
Type	Journal Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/9960
Rights	Copyright (C)2008 日本音響学会，赤木正人，日本音響学会誌，65(1)，2008，1-2.
Description	

Japan Advanced Institute of Science and Technology

巻 頭 言

アジアの音*

日本音響学会副会長 赤 木 正 人**

あけましておめでとうございます。2009年の初春を心よりお慶び申し上げます。

さて，私事で恐縮ですが，ここ数年，大学の仕事の関係で，東（南）アジアの都市へ行く機会が増えております。訪問するといつも感じることなのですが，朝ホテルで目覚めたとき聞こえる雑踏の音，バイクの音，クラクションの音，これらが，ヨーロッパに出張したときとは何か違う，アジア特有の音とでも言いましょうか，独特の活気，エネルギーを感じさせる音に聞こえてきます。

ここ数年を振り返ると，例えばハノイでは，雑踏はあいかわらずですが，自転車の音からバイクの音，最近は車の音が多くなってきたように感じます。中国は，約20年前初めて足を踏み入れたときは，どこに切れ目があるのか分からないくらいの自転車の行進でしたが，ここ数年，自動車が道を埋め尽くし，自動車の音とクラクションの音，そして，人々の声が混ぜあわされて，新しい雑踏の音になっています。台北でも同じような光景（音景？）を耳にしました。恐らく，私が最初に訪ねた二十数年前から，いろいろな分野で発展し，それに伴って，朝ホテルで聞こえてくる音も変わってきているのでしょう。聞こえてくる雑踏の音の変遷，そしてその速さが，これらの国々の発展のエネルギーの大きさを表している感じがします。

このように，耳からも成長，発展が感じられるアジアですが，いろいろ成長している中で，我々に興味があること，例えば，音に関する研究のアジアでの発展動向は，どのような状況でしょうか。実は，国ごとにかなりの差があります。

香港・台湾を含む中国，韓国，シンガポールは，経済的にもアジアのトップ集団を形成していますが，音響研究においても，様々な国際会議等で多くの発表が出てきています。中には，日本をしのぐ分野も見られ，日本の研究者としてもうかうかしてはおられない状況です。しかし，アジア全体を見渡すと，このような国ばかりではないことは，皆さん，ご存じのとおりです。例えば，ベトナム。経済は年率8%を超える発展をし，国民1人当たりの所得も向上していますが，音の研究は，戦乱による長い中断の後，やっと緒についたばかりです。タイ，インドネシア，マレーシア，研究の芽は確実に育っているように見受けられますが，まだまだこれから，という状況です。他の国は，政治情勢もあり，音の研究どころではないかもしれません。でも，それぞれの国・地域をもっと細かく見ていくと，音響研究に向けた流れは少しずつではありますが，確実に太くなっているように感じられます。例えば，私もお招きを受け参加した会議は，ベトナムを中心としたこの地域を代表する会議で，この地区の音声言語研究者が多く参加し，活発な討論が行われていました。このような状況を見るにつけ，現地を訪問する回数が増えるごとに，私の中で「我々は，アジアの一員として，音の研究について何かお手伝いできることはないか」という気持ちが大きくなっております。

ここまでは私個人の勝手な気持ち（夢？）なのですが，これを音響学会会員の方々と共有できないものか，もし可能性があるならばこの誌面を借りて会員の方々に呼びかけたい，実

* Sound in Asia.

** Masato Akagi (JAIST, Nomi, 923–1292)
e-mail: akagi@jaist.ac.jp

は，そんな思いでこの文章を書いております。

というのも，音響研究に関して，他の地域での国際援助（共同研究）に目をやると，アメリカ地区ではアメリカ音響学会，あるいはIEEEが，各国の音響研究者を会員として，音響研究・教育の発展を指向しています。ヨーロッパでは，それぞれの国の音響学会の集合体であるEuropean Acoustics Association (EAA)が1992年に設立され，ヨーロッパとしての音響研究・教育についてプレゼンスを保とうと努力しています。そして，3年に1度，Forum Acusticumを各国の学会が持ち回りで開催しております。他地域でこのような活動がある中で，音響関係で規模が世界第2位の学会として，アジアに拠点を置く学会として，日本音響学会が「アジアの音」に何か貢献することを考えても良いのではないか，と考えているからです。

現状，アジア地区ではどのような国際援助（共同研究）の活動が存在するのでしょう。アジア地区の国と日本の2国間での活動を見てみると，昨年度第2回目が仙台で開催された日中音響学会議，九州支部が中心となって行っている韓国との共催研究会，など，様々な活動が行われています。また，多国間での活動としても，一昨年度のソウルでの会議で9回目を数えたWestern Pacific Acoustics Conference (WESPAC)，音声の分野ですが東アジア言語に関する音声研究を推進することを目的として1997年に設立されたOriental COCOSDAなどがあります。アメリカ，ヨーロッパと比べると発展途上であることは否めませんが，コミュニティは着実に大きくなっています。

この発展をより加速するため，これらに加えてもう一押し，あるいは別の角度からの貢献は考えられないものでしょうか。アジアの音研究者が日本音響学会の会員として一つになるというASA，IEEEのようなアメリカ型はアジアでは現実的ではないと思われるので，例えば，ヨーロッパのように音響学会の連合体を組織した上で，共通の雑誌の発刊を行うとか，アジア地区の多数の研究機関が参加する共同プロジェクトの音頭をとるとか，何か新しい試みをそろそろ考える時期だと思われます。

また，昨年7月29日付けで，文部科学省ほか外務省，法務省，厚生労働省，経済産業省，国土交通省が，「留学生30万人計画」の骨子を発表しました。これが実現すれば，今以上に留学生がたくさん日本に訪れるようになります。交流の場を拡大する条件は整い始めているのではないでしょうか。

アジアの都市に降り立つと，いろいろな音があふれ，生活のエネルギーがあふれ出しています。きっと，今後も発展は続いていくことでしょう。この中で，よりよい発展の方向を目指して，生活の質の向上，特に音に関する生活の質の向上について，音響関係で規模が世界第2位の学会として，音に関するアジア最大の学会として，更に，ヨーロッパにはない「アジアの音」を共有するものとして，少しでも役に立てることはないでしょうか。「情けは人のためならず」。2009年の幕開けに，音のこと，そして，音での人助け，何か人のためになることをいっしょに考えませんか。